

ブータンのラック養殖とラックの利用について ーラック染色の技法を中心にー

久保淳子

ブータン人にとって身近なラックについて、その養殖と利用方法を紹介したい。

1. ラックの養殖

現在でもラック (Jatso, Tsos) の養殖が行われている地域はブータン東部のモンガル (Mongar) 県のヤディ (Yadi) 周辺のみである。標高差を利用し、夏と冬で繁殖させる場所と親木を変えて養殖を行う。

<収穫用のラック> 5月頃種つけ⇒10月末～11月はじめに収穫

標高 1,400m前後の丘に生える大木を親木とする。親木は現地の言葉で「ルルムシン」と呼ばれるクルミ科の木 (*Engelhardtia spicata*) の他、数種類あるらしい。収穫したラックは枝から剥がし、乾燥させる。売りに行かなくても染色をする人たちが遠くから買いに来る。大木のルルムシンにラックと繁殖させるのと並行して、「チャンバクタシン (アオイ科)」や「パンセルシン (マメ科)」にもラックを繁殖させ、その枝は 40cm ほどの長さに切り、中央に切れ目を入れて菜箸のように V 字型に折り曲げて標高 7～800m の谷底に運び、「カンカルシン」と呼ばれるクロウメモドキ科のインドナツメ (*Ziziphus mauritiana*) の枝にかける。

<冬の種ラック> 11月はじめに種つけ⇒5月頃採取

スティックラックから這い出した幼虫はインドナツメの枝の上で繁殖するが、その量は夏の繁殖に比べると少ないため、全て種ラックとして使われる。5月頃には枝を切り落とし丘の上のルルムシンまで運び夏の繁殖に繋げる。

ラックはブータンからチベットへの主な輸出品の一つでもあった。以前はこの地方に行けば簡単にラックの養殖が見られた。専門のラック農家ではなく、トウモロコシや豆などを栽培する農家が副業としてラック養殖も行っているのだが、ラック養殖を止めてしまう人が増え、ここ 2 年のうちにラックの値段は以前の 3 倍になり、入手が非常に困難になってきた。高い木に登る仕事のきつさもあるが、殺生を嫌う仏教徒としての心情が大きな原因だ。

2. ラックはブータン染色のメインカラー ラックの染め方

ブータン中央部のウールの産地 Bumthang (ブムタン)、東部の絹 (紬) 織物の産地 ラディ (Radi) では、現在も天然の染料を使った染色が引き継がれている。赤を染めるのにはアカネ (*Rubia manjitha*) も使われるが、ラックのほうが堅牢度も高く上等な色とされている。ラックからは濃い臙脂色だけでなく、色の濃淡を調整し様々なバリエーションの赤、上手な人ならば

鮮やかな明るいピンクも染められる。またリュウキュウアイ (*Strobilanthes cusia*) との重ね染めにより紫を得られる。

ブータンの正装では男性は「カムニ(Kabney)」、女性は「ラチュ(Rachu)」という布を肩にかける。身分により色が異なり、特別な功績により国王から「ダショー(Dasho)」という称号を付与された人のカムニ(またはラチュ)の色はラックで染めた臙脂色である。ちなみに、外国人でダショーの称号を持つのはブータンの農業に貢献した西岡京治氏ただ一人である。

<ラックの基本の染め方>

ブータンの染色では(藍を除く)、媒染剤にハイノキの仲間(*Symplocos* spp.)の葉を使う。葉を煮出した液に糸を入れて煮て媒染する。糸は黄色く染まる。次にラックの染液で煮染めをするのだが、ラックをそのまま煮ると蠟・樹脂が溶け出し、糸についてしまう。そのため、小さく砕いたラックをバケツなどの容器に入れて湯を注ぎ、攪拌し、布などで濾すという作業を繰り返して染液をとる。しまいには粘土のような樹脂分「ラチュ(Lachu)」が残り、色はほとんどでなくなる。

こうして得たラック染液に酸っぱい実を加える。通常、ボケ(*Choenomeles lagenaria*)の実をスライスしたものを入れるが、なければ野生のリンゴ、ヌルデの実、アムラ(*Phyllanthus emblica*)など、酸味のある実で代用できる。ラック染液に酸っぱい実を加えた中に糸を入れて煮染めする。

<バンツォ(浸し染め)>

ボケの実を入れた湯(ラックが溶け出すほどには熱くない湯)に細かく砕いたラックを入れ、そこに糸を浸してゆっくりと染める方法もある。ムラにならないように毎日混ぜながら一週間程糸を浸したままにして、十分に染まったら糸を取り出しラックを注意深くよく落とす。その後、ハイノキの仲間の葉を煮だした液に糸を入れて加熱し、媒染する。時間のかかるバンツォで染色することのメリットについて聞いてみたが、はっきりした回答は得られなかった。

<発酵ラック染め>

ブムタン地方特有の染め方。基本の染めと同じ方法でラック染液をとる。そこによく炒った大麦とお酒を作るのに使うイーストを加え、毛布にくるむなどして保温する。夏なら9日、冬なら15日くらいかけて発酵させ、ビールのような臭いがしてきたら染液を火にかけて糸を入れて煮染めをする。その後、ハイノキの葉を煮た液に糸を入れ、加熱して媒染をする。ラック液を発酵させることにより、色のつきが良くなり少ない量のラックでも多くの糸を染めることができるという。

尚、染めた糸は緑の草の上において直射日光を当てて干すと色が良くなると信じられている。またブムタン地方では色を損なう嫉妬心や邪気を避けるため、トウガラシや山椒を燻しておまじないをする。

3. ラチュの利用

染めの過程で残った樹脂分であるラチュは荷物の封をする封蝋などに使われた。一昔前は県の役人が染色をする人の家々をまわって買い集めたそうだ。

漆器で有名なタシヤンツィ (Trashhi Yangtse) では椀などに削る木片を轆轤に接着するのにこれを使う。蝋燭のように固まっているラチュを火で焙って溶かし、木片に垂らして轆轤に押し付ける。激しい回転に耐えられるのだから、接着力は強い。また、一般家庭でも、鏝を竹の矢に接着したり、刀の刃を柄に接着する用途にも用いられる。都会の暮らしは変わったが、田舎に行くと今でも日常的にラチュが使われている。

ブムタンのタン(Tang)谷にある中世領主の館「ウゲンチョリン城博物館(Ogyen Choling Palace Museum)」には、祭礼に使われた仮面と、その仮面を作るのに使用した型が展示されているが、その型がラックで作られている。また、クルテ(Kurtoe)地方のルンチ (Lhuentse) では、土鍋を作る際に長時間素焼きにし、火から取り出した瞬間の熱い鍋の口部分にラックを塗っていた。焦げたラックの黒ずんだ色が鍋の装飾にもなり、ラックを塗ることで割れにくくなるという。

4. 薬としてのラック

薬草病院の薬の原料の展示の中にもラックがある。”Medicinal Plants of Bhutan.”(ITMS, Ministry of Health)の資料によれば、肺、腎臓の不調を整える他、血液の病気、西洋医学の言葉には翻訳できないいくつかの病に効く成分があるとされる。民間療法ではラックを使う人は少ないが、中には湯にラックを入れて飲むとぎっくり腰の痛みを取る、血が足りないときに効く、という人もいる。試しに飲んでみたが何の味もないただの赤い湯だった。